

L13a      **ほうおう座流星群における 2008 年、2014 年、2019 年の予報研究**

佐藤幹哉、渡部潤一 (国立天文台)

ほうおう座流星群は、1956 年に 1 時間あたり数百個という大出現を記録した流星群である。母天体は、1819 年に一度だけ出現して、その後行方不明となったブランペイン彗星 (D/1819 W1) であるが、この天体は小惑星 2003 WY25 として再発見されたため、母天体の過去の軌道と現在の軌道がリンクし、過去の軌道が精度良く計算できることとなった。これにより、過去に母天体から放出されたダストが作る、ダスト・トレイルの計算が可能になり、母天体起源の流星群の予報が可能となった。筆者らは、1956 年の流星群の大出現が、18 世紀～19 世紀初頭に放出されたダストによるダスト・トレイルに起因していることを報告している (Watanabe et al. 2005)。

1956 年以降では、2020 年までの期間に、2008 年、2014 年、2019 年にダスト・トレイルと地球が接近し、流星群の出現の可能性があることが判明した。2008 年には 1866 年放出、2014 年には 19 世紀から 20 世紀初頭放出、2019 年には 1872～1898 年と 1946 年放出のそれぞれダスト・トレイルと接近する。本発表では、これらの年におけるダスト・トレイルの接近状況と予測される出現状況を示し、また流星群の観測結果からダスト放出時の母天体の活動度を推測する新しいアプローチについて発表する。